

ホトトギス

六月号

ホトトギス

昭和二十五年三月二十五日創刊
明治二十二年十月十日創刊
昭和十九年三月一日創刊
第一卷第六号



俳句随想〔三百〕

汀子

「現代俳句の金子兜太という俳人がいます。その金子さんは『芭蕉のこの句の蛙は古池に飛び込んだのではない。隅田川に飛び込んだのだ』と言つて世間を騒がせています。」と言つと会場は爆笑に包まれた。「皆さんはお笑いになりますか、この句をよく見ると、確かに蛙が古池に飛び込んだとは書かれていませんね。」今度は会場がしんとなつてしまつた。そこで挙手をしてもらうことで皆さんの意見を集約すると、隅田川に飛び込んだと思う人が一人。どうやらこの人は私の講演の意図を察しているかのようにあつた。次にこの蛙はどこにも飛び込まなかつたと思う人が一人、この人は大学院生らしく、もしかすると長谷川權さんの『蛙は古池に飛び込んだか』を読んでいるのかも知れなかつた。そしてこのりの五十八人の全ては古池に飛び込んだという意見であつた。

「金子さんの意見は芭蕉のこの句が文章としては不完全であるということとを逆説的に衝いたものとすればなかなか鋭いと言わざるを得ませんね。ではこの句を完全な文章にすればどうなるでしょう。」

旬日記 汀子

平成十八年六月三日 芦屋ホトギス会

山梔子の花遠ざかるとき句ふ
出水なきことを祈りて守る資料
夏帽子かぶりたるより旅心
飛ぶものも靡けるものも夏野かな

六月四日 関西野分会

好き嫌ひ有無を言はず鰻とる
いきなりの花に添はぬ葉アマリリス
結局は鰻に決めて多数決

六月四日 下萌句会

いくたびも咲いてゐるかど花みかん
蚊遣火の役に立つとは思はれず
庭に置く蚊取線香闇を統べ
所在なきみかんの花の香の所在

六月五日 ロイヤル俳壇

蝮蝸棲んでゐる山荘の戸を開けに
花菖蒲には紫といふ袴持
皆涼しさうな笑顔で卓囲む
これよりの卵の花腐し障らねば
花菖蒲園の起伏といへぬほど

六月八日 清交社

椎の花匂ふ旅路の待つてをり
椎の花やうやく抜けて日本海
狭庭にも季節のはざま青嵐
城山の威をやはらげて椎の花

あきらめて梅雨に処すべき旅支度
六甲の山を沈めて青嵐
片づかぬ机上に梅雨入り近きこと

六月九日 工業倶楽部

雨予報旅に用意の夏帽子
東京へ日帰りの旅梅雨に入る
花菖蒲近き紫遠き白
草の先離れたるより糸蜻蛉

六月十日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

露涼し雨の予報の又はづれ
似合ひても似合はなくとも夏帽子
旅に買ひそれから旅の夏帽子
六月十一日 北近畿ホトギス俳句大会

六月十三日 大阪倶楽部

無防備を蚊に狙はれてゐる旅路
椎の花匂ひに所在ありにけり
入江とて海に沿ふ宿明易し
短夜であること忘れ旅にあり
山荘のまどぬ今なく火取虫
蚊のひそむ庭に客人通されず

六月十三日 綿業倶楽部

梅雨入りしてより快晴の日のつづく
雨一と日紫陽花毬をほどこけり
重さに軽さうに活け七変化
梅雨晴の旅路の展け日本海

六月十七日 句会と講演の会

池の面に目高の所在追ふ朝
雨上りぬても梅雨空なりしこと
世界に目向けて目高の世界見る
紫蘇きざみ来し指先の匂ひけり

六月十八日 野分会
向きむきの何れ正面アマリリス
六月二十日 有恒倶楽部

剪るとききの迷ふ大小七変化
朝より訪問客や明易し
一日に二つの句会五月晴
晴れてぬし離陸梅雨の着陸に
六月二十日 無名会

喉ふるへはじめ鳴き出す雨蛙
保護色といふ保身術雨蛙
棟咲き旅路はるけくありしかな
配られしさくらんぼうの席に着く
雨蛙自分の色を知つてをり
重さなき如く葉に乗り雨蛙
六月二十一日 夏潮句会

咲き疲れたる合歡の花夕べ来し
見えて来し泰山木の花匂ふ
汗引いてゆくを待ち又庭に出る
お隣の会をこぼれて夏至夕べ
夏至といふ日を無駄遣ひしてをりぬ
六月二十二日 きさらぎ会

十薬の匂ひ起して雨止みし
糸蜻蛉止まりて草になりきりし
一かには二十四時間夏至過ぎぬ
夏至といふ油断のありし外出かな
六月二十三日 時雨会

見た目ほど涼しからざる和服かな
拾ひ来し実梅匂ふと渡さるる
まくなぎを払ひ果せぬ思ひなほ
日本の梅雨に着くてふ旅いかに

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年六月一日 蕉心会

夏空を下町 氣質引き寄せて

夜追ひ越して水上バス涼し

青蔦に蕉像そつぽ向いてをり

水舐めてより薫風となる隅田

白日傘黒日傘絵日傘闊歩

そんなこと言うたら毛虫つけたるか

七変化 君は変幻自在かな

六月七日 一水会

明易やサツカゝそんなおもしろいか

六月七日 はせを句会

ええ仕事しまつせ団扇買うてんか

ついでに前北半球の戦けり

六月八日 十筆会

夏帯や彼女が居ればこの席に

夏帯といふ悱の永遠にあり

子鵝と判る高鳴きありにけり

夏帯を召されて昨夜の夢に現れ

六月十、十一日 北近畿ホトトギス大会

鰻釣るといふ少年の声高し

対岸は共産圏や波涼し

砲身の朽ちてをり蟻寄せてをり

六月十二日 朝日カルチャー若草句会

黒南風に橋立の松鎮もれり

黒南風にビル白々とありにけり

黒南風や鳩うづくまり犬走り

六月十五日 登高会

出港や夏手袋の揃ふ拳手

鈴蘭に降りすずらんに発つジャンボ

鋼鉄の鳥居茅の輪に畏まり

日出づる国の品格茅の輪かな

老巨匠夏手袋といふタクト

夏手袋しなやかに注ぐシャブリかな

六月十七日 ホトトギス社句会

紫蘇の香を使ひ切つたる夕餉かな

六月十九日 はいくの学校

銀やんま生徒の声に囃されて

六月二十日 草木瓜会

動くとも見えず蛞蝓消えゆけり

始まりはこの一滴に夏の川

水嵩といふ夏川の主張かな

蛞蝓や昔の母は強かつた

その中の命増えゆく夏の川

里山の使者を運びて夏の川

六月二十一日 六甲会

握り良し押ししてなほ良し穴子鮓

東京と芦屋一枚夏至の空

俳碑に夏至の空あり風のあり

合歓咲いて故郷の庭らしくなる

六月二十一日 虚子記念文学館出句

俳碑の千基に夏至の風そよぐ

六月二十七日 若水句会

蟻地獄めく君の所作ありにけり

藤椅子に座せば山荘暮れゆけり

言はれれば人面岩や苔の花

虚子の世のごとく藤椅子置かれあり

待つといふ死活問題 蟻地獄

六月二十八日 目黒学園句会

競べ馬京の喧騒集まれり

波騒ぎ浮巢黙してをりにけり

夏帽に恋の予感を見てをりぬ

パナマ帽パイプ脚へて波止場かな

鶏の巢に池の盛衰ありにけり

ダービーに身を滅ぼして橋の下

六月三十日 江東区芭蕉記念館 初心者俳句教室

万緑にビル沈みゆく都心かな

白南風を待ちたる池の黙かとも

山梔子の花錆びて尚香を放ち

青鷺の孤高に餌を啄めり

雑詠

廣太郎 選

かまぐらの中に幼き月の使者 秋田 佐々木ちてき
 小かまぐら一つ一つに灯の吐息 同
 梵天の勢子に坂徑神の道 同
 狐火を信じ唯物論信じ 河内長野 吉年虹二
 電飾は師走の絵巻街競ふ 同
 独楽廻るまでの真顔のありにけり 同
 胸中を貫く大河去年今年 熊本 岩岡中正
 玲瓏の日が双肩に初詣 同
 熱爛や黒白をつけたがる癖 同
 実南天醬の蔵の年古りて たつの 浅井青陽子
 蘭香り繭玉ゆるゝわが居間に 同
 書初に山河と誌し海を見る 同
 鯨来る海が自慢の島の宿 神戸 山田弘子
 その後の青虎夫人に冬ぬくし 同
 本ものの景気これより初戎 同
 日輪を底ひに沈め水ぬるむ 同
 底石のせり上りたる水ぬるむ 同
 五位鷺の沈思黙考水ぬるむ 同

天平の世をしのぶ子規偲ぶ秋 長岡 安原 葉
 また一人加はる忌日萩の露 同
 怒濤寄すごとく一樹へ椋鳥の群 同
 張替へし庭の芝生や春浅し 榎原 稲岡 長
 やはらかき枯色に飛び野焼の火 同
 透きとほりつつ薄氷の二三片 同
 歳晩の神戸光の海に浮く 神戸 長山あや
 虚子百句訳し果せし漱石忌 同
 枯れ枯れて風となりゆく芒かな 同
 北風に小走り気味の歩を運び 福岡 松尾緑富
 万両の実を啄みに二三三日 同
 雨戸繰る刻限しかと日脚伸ぶ 同
 新幹線より見る富士に日脚のぶ 熱海 嶋田一步
 小田原の次は熱海や蜜柑山 同
 バスで来し熱海に目立ち寒桜 同
 ここに住み冬籠無しミモザ咲き 同
 スケートを脱ぎし歩みの波打てる 同
 大島の図体見ゆる日冬晴るる 同
 浮寝鴨覚めて日当る方へ行く 同
 一と騒ぎしてまた浮寝する鴨に 相模原 木村享史
 炭爆ぜて柱時計が鳴つて朝 同
 また餅を焦す匂ひの書屋まで 東京 大和 勲
 年々に小ぶりとなりぬ雑煮餅 同
 ショールとり成人式の人となる 同

雑詠句評（五月号より）

保佳・芳子・千鶴子

むつみ・葉・静龍

中正・とほ歩・憲明

眞理子・美奇・廣太郎

師走てふ景気見られぬ町中を 福岡 松尾緑富

師走というほどの景気の見られない町中を歩いて行つた。というところであろうか。結局の「町中を」の語はいろいろとつけ足す解釈もあるかも知れないが、やはり「歩いて行つた」というところであろう。事実をたんと述べただけの句のようであるが、各地で大型店舗出現による商店街はシャッター通りとなつてしまつた。現代の世相の一端を事実のまま表現したところが、この句の味であろう。商店街の賑わつた昔を知つている作者にとつては、いかにも淋しいという心情の伝わってくる一句である。

（保佳）

かつてはバブル期から、バブルが弾け、不景気のどん底にあつ

た日本も、ようやく景気回復の兆しが見えてきたとはよく言われる事ではあるが、まだまだ庶民には程遠いのではないだろうか。特に「師走」となると顕著にその姿があらわれてくる。季節がしみじみと語られている。（廣太郎）

街ひとつ祈りで満ちて冬灯 神戸 涌羅由美

作者は神戸であり、街をあげて祈り冬灯、といえは、すぐあの阪神大震災の事を思う。あれから早くも十二年経つたとは思えない程昨日の事のように思い出す。毎年一月十七日がくれば、新聞でも、テレビでも朝早くから放映され、神戸、淡路他被災地では、街がひとつになつて灯を捧げ、黙祷を捧げ悲しみを新たにしている。作者の身近の方は無事であつたことを確かめ、ホツとしたが、私も又大した被害はなかつたが大切な句友を亡くし、家を失われた方など、天災の怖ろしさをまざまざと覚えた。蠟燭の一本でも捧げ度い気持である。この一句にすべてを物語られている。

（芳子）

作者の地名から想像すると、あの阪神・淡路大震災を想像してしまふ。そうするとこの「冬灯」は年末行われるルミナリエではないだろうか。東京でも一時期年末の電飾が丸の内で行われていたが、神戸は大震災の犠牲者に対する鎮魂の心が込められているのである。正に「祈り」のイベントである。（廣太郎）

天地有情

江子選

わが学ぶ道の嚆矢の宗鑑忌
 慶びの溢るる日なり菊の宿
 東大寺様の端借る紅葉狩
 奈良ひと日神の間に間に紅葉かな
 独座して和敬清寂寒に入る
 寒くとも心が倦めば庭にあり
 冬桜一語こぼして仰ぎけり
 弟子として矩を躰えざる去年今年
 襟巻の狸怪しく睨みをり
 冬日影だけは八頭身であり
 かげろふの中へ影曳き去りゆけり
 陽炎の中の子供の浮いてをり
 犬どちの亀の鳴くのを振り向かず
 鳥の巢ひとつ抱へて大樹なり
 寒菊や頃ともなれば目を引きて
 職退きて一年経たる寒菊に
 冬館華やぐ声のあり初めし
 もてなすに牡丹槽を以てせり

長岡 安原 葉
 同 同
 大阪 佐土井智津子
 同 同
 豊中 瀧 青佳
 同 同
 たつの 浅井青陽子
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 同 同
 榎原 稲岡 長
 同 同
 東京 坊城俊樹
 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同
 同 同
 明石 中杉隆世
 同 同

よく晴れて暮れて月あり春隣
 待春の月のうるめる夜の句会
 野火出でし人影のまた野火に入る
 鶯やもう音の出ぬ蓄音器
 風のなき真闇埋めてゆける雪
 ソシユールの話もゆるぶ春障子
 夜は月のすべり込んだる寒牡丹
 予定立つことより春の動き出す
 祈りつつ地震の忌日の焚火かな
 枯芒焚けば火の絮天へ翔つ
 東京の授賞日和に雪の富士
 唯我の招きし禍福年暮るる
 百歳の消息問はれぬる御慶
 成人の日が行き交へるロビーかな
 眼中のもの胸中のもの凍てて
 人もまた無口がよけれ冬木立
 裏木戸に手付かぬ雪のありにけり
 出迎への無くて終着駅の雪

東京 今井千鶴子
 同 同
 箕面 井上浩一郎
 同 同
 吹田 宮崎 正
 同 同
 八尾 岩垣子鹿
 同 同
 神戸 長山あや
 同 同
 徳島 上崎暮潮
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 東京 橋本くに彦
 同 同

天地有情句評

汀子

わが学ぶ道の嚆矢の宗鑑忌 長岡 安原 葉

俳諧の祖である宗鑑の忌日には作者の真摯に学ぶ姿勢が読み取れる一句。

東大寺様の端借る紅葉狩 大阪 佐土井智津子

奈良の東大寺の広い敷地の一劃の紅葉狩である。

寒くとも心が倦めば庭にあり 豊中 瀧 青佳

詩人としての心の持ち方が想像される。

冬桜一語こぼして仰ぎけり たつの 浅井青陽子

読者が想像する一語は何であろうか。

冬日影だけは八頭身であり 東京 稲畑廣太郎

夕方であろうか西に傾いた太陽が作る影は長い。

陽炎の中の子供の浮いてをり 榎原 稲岡 長

陽炎を実際に見ている作者の捉えた現実の姿。

烏の巢ひとつ抱へて大樹なり 東京 坊城俊樹

忽ち増えていく烏の巢作りが始まった大樹。

職退きて一年経たる寒菊に 福岡 松尾緑富

ようやく恪勤の日々から解放されて見る寒菊への思い。

もてなすに牡丹櫓を以てせり 明石 中杉隆世

牡丹櫓を焚いて暖を取るといふもてなしを知った感動。

よく晴れて暮れて月あり春隣 東京 今井千鶴子

季節のはざまの変化の多い気象状況に心弾ませて。